

〔研究論文〕

テキストに媒介された言説とイデオロギー・コード
——ドロシー・スミスの institutional ethnography をめぐって——

上谷 香陽

〔Article〕

**Consideration on Textually Mediated Discourses and Ideological Code
in Dorothy Smith's Institutional Ethnography**

Kayo UETANI

Abstract

The purpose of this paper is to examine the idea of Dorothy Smith's institutional ethnography (IE) through reading her article "The Standard North American Family: SNAF as an Ideological Code" (Smith 1999:157-171).

In her sociological investigation, Smith re-raised the classical sociological issue about the relationship between people's local and particular experience and extra-local and general social relations. And she suggested an alternative sociology that explores how the everyday world of people's experience is put together by social relations that extend beyond the everyday world.

The point of the "SNAF" article is to explore the operation of SNAF as 'ideological code' within what she called 'ruling relations'. Ruling relations are internally coordinated complex of administrative, managerial, professional, and discursive organization that regulates, organizes, governs, and controls our societies. Within these relations, SNAF code operates to coordinate multiple site through textually mediated discourses.

In the "SNAF" article, ideological code is regarded as a constant generator of procedures for selecting syntax categories and vocabulary in the writing of formal texts and for interpreting sentences, written or spoken, ordered by it. Smith argues that SNAF-governed texts are ubiquitous and give discursive body and substance to a version of The Family, and mask the actualities of people's lives especially when they do not accord with SNAF.

Through examining the idea of Smith's 'textually mediated discourses' and 'ideological code', this paper tries to develop the method of sociological inquiry into knowing the social from people's actual everyday world.

1. はじめに

本稿は、ドロシー・スミスの論説、「標準的な北アメリカの家族：イデオロギー・コードとしての SNAF」("The Standard North American Family : SNAF as an Ideological Code." (Smith 1999:157-171)) を読解しながら、スミスの社会学における「テキストに媒介された言説」についての議論を考察す

る。この論説は1999年に出版された *Writing the Social: Critique, Theory, and Investigations*. という著作に収められている。

スミスの社会学の主題は、個人の経験とそれを超えた一般的な社会関係はいかにして関わり合うのか、という社会学の古典的な問いを、実際に日常生活世界を生きる人々の経験の場所から問い直す方法を開発することである。人々の生活(living)の毎日毎夜の局所的アクチュアリティ⁽¹⁾はいかにして、その外に拡張し、その内部では発見できない社会関係によって組織され決定されるのか。個人の経験の成り立ちにおいては、局所的で個別的な出来事と一般化された社会関係の関係は二項対立的なものではない。人々は日常のお決まりのルーティンを遂行する中で、自分の生活や経験を外側から組織し、調整し、規制し、誘導し、統制する拡張された社会関係に無自覚的に参加している可能性があるのだ。人々が、特定の時間や場所、特定の文脈に状況づけられながら、日々のお決まりのルーティンを遂行する中で知っていることや行っていることには、より大きな社会関係に接続する入り口が見出しうるのである。

スミスによれば、個人の経験と一般的な社会関係が関わり合うのは、何らかの institutional な、場面、文脈、過程、ワーク⁽²⁾においてである。ここで institution とは、多様な行政・経営・専門組織において生起する、今日の(先進資本主義)社会を組織し、調整し、規制し、誘導し、統制する諸関係の複合体のことである。例えば、institution を英英辞典(Oxford Dictionary of English)で引くと、1. 宗教的、教育的、専門的、社会的目的のために設立された組織、2. 確立された法や実践、3. 何かを設立する(instituting)行為、とある。スミスの institution の使い方は、この英英辞典の用法に近い。つまり、第一義的には、北米社会における人々の日常生活に深く関与している、教育や医療や行政や経営や法や知識などに関わる諸組織や機関や施設などのことである。これら institutions は相互依存的に関連する複合体を成しており、実体的な組織としてのみならず、「客観化された知識(objectified knowledge)」を媒介に複数の人々の行為が連鎖し協働する諸関係の交差点や協働として捉えることができる⁽³⁾。

本稿で取り上げる論説においてスミスは、テキストを書く／読むという経験における、「社会的なもの(the social)」の社会的組織化の問題に着目している。個別的で具体的な個々人の経験は、テキスト——印刷されたものであれ電子的なものであれ、複製可能な物質として組織間を流通する公的な文書に媒介された、客観化された言説的な知識の形式——に関わることによって、一般的で抽象的な社会関係に接続される。この過程で何が起きているのかを、様々なやり方でそれに巻き込まれ、それに参加している人々の立ち位置から解明する社会学的探究がめざされるのである。

人々の個別具体的な毎日毎夜の生活で起こったことは、何らかの institution に関わることで、テキストに媒介された言説に包摂され、客観的で一般的で抽象的で標準化された知識の形式で——社会現象として——共通に知られることになる。スミスによれば、特定の個人から独立しているものとしての社会的現象は、実際の日常生活世界の特徴というよりは、行政・経営・専門組織がその弁別的な機能を果たすために作り出された言説的な構築物である。institutional な過程に不可欠な構成要素である「客観化された知識」は、専門的学問的なカテゴリーや概念それ自体だけでなく、そうした「知識」を提供するために専門的学問的言説において体系的に開発されたものの見方——イデオロギー——を含むものである。本稿で取り上げる論説では、「標準的な北アメリカの家族(SNAF)」というある種の家族観(イデオロギー)が取り上げられている。

以下本稿で考察する論説において題材とされるのは、社会学的な知識を産出するためにスミス自身も日々行っているルーティン—— institutional なワーク——である。一つは、無限の多様性を含

む個別具体的な人々の生活のアクチュアリティを、「客観化された知識」としての「社会的なもの」に変換するワークについて、もう一つは、すでに専門的学問的言説において構築された「社会的なもの」を前提として社会学のテキストを読んだり、新たなテキストを書いたりするワークについてである。ここでスミスは、「イデオロギー・コード」が、公式のテキストに媒介された言説と大規模な組織が交差する諸関係の内部で複数の場を協働させていく、そのやり方を可視化しようとするのである。

2. イデオロギー・コードとしての SNAF とは

以下本稿で取り上げる論説は、スミスが「支配する関係(ruling relation)」と呼んできたある種の社会関係についての考察の一環として位置づけられる。ここで「支配する関係」とは、人々の日常生活世界を組織し規制する客観化された社会関係の複合体のことである。具体的には、官僚制、行政、経営、専門的組織、メディアという形式で知られている。伝統的な社会科学は、支配する諸関係を、国家、官僚制、公的組織、マスコミ、科学、大衆文化などの、組織の別々の形式や単位としてみなしてきた。しかしそれら諸組織の発展は、互いにますます協働するひとつの複合体を生み出してきたのだと、スミスは指摘する。

その複合体は、特定の場所を占めずに、関連する局所的場を組織する、諸関係の体系や領域を形成している。この複合体の諸関係はテキストに基づき媒介されているので、協働の重要な機能は、イデオロギー、概念、理論などによって遂行される。イデオロギー、概念、理論などは、そうでなければ独立に作動する専門化された場へ、複合体の諸関係が持つ、秩序づける能力を挿入する。それらはまた、テキストを生み出し、その内的組織を構成する。そして、テキスト相互間を規制(regulate)し、テキストを読み場において解釈するのである。たとえば統計を集める政府のシステム、大学やシンクタンクの社会科学的調査、政府の政策作り、マスメディアなど、異なる場面において生成されるテキストは、内的に一貫した世界像を生み出し、政策のトークや判決の用語を提供しながら概念的に協働されていくのである。

この論説でスミスは、彼女が「イデオロギー・コード」と呼ぶものが、いかにして、公的なテキストに媒介された言説と大規模な組織が交差する諸関係の内部で、複数の場を協働させるのかを探究する(Smith 1999:157)。ここでのプロブレマティック(疑問の余地のあること)は、子どもの学校生活と関連した母親としての女性たちのワークの調査をする、という自身の経験を反省的に扱う中で生じてきたものだという。この一連の調査は(それがたてた問いを含めて)スミスと共同研究者のAlison Griffithに、シングル・ペアレントであるという彼女たち自身の経験、そこから引き出される調査の問題構成、インタビューのデザイン、インタビュアーと回答者の理解する実践活動、において作動する言説的枠型(schema)への注意を喚起した。テキストに媒介された言説を、複数の局所的歴史的場とアクチュアルな人々の局所的に結びつけられた活動を協働する社会関係として探究するにあたって、スミスは、この言説的枠型についてのトピックを調査の局所実践活動の探究として始めることにしたのである(Smith 1999:158)。

ここで、テキストに媒介された言説(text-mediated discourse : 以下 T-discourses)とは、文化、意味、意義(signification)、意義の連鎖、位置づけられた(located)読み手のいないテキストとしてではなく、社会関係を束ねるものとして捉えられている。この社会関係は、テキスト的に媒介され組織されるのであり、アクチュアルな諸個人——かれらの局所的で歴史的な読む／聞く／見る場は、地

理的・時間的に分散しており、制度的にも多様なのだが——の活動をつなぎ協働させるのである。スミスによれば、T-discourse という考えは、テキストによって媒介された会話としての言説というフーコー的概念を超え、実際の人々がテキストを取り上げるやり方、実践活動や一連の行為がテキストによって秩序づけられるやり方、テキストが誰かの活動を他の誰かの活動と協働させるやり方を含むのだという (Smith 1999:158)。

人々は、T-discourse のテキストによって秩序づけられた実践活動に入り込み、T-discourse の諸関係のアクティブな参加者になる。人々はありふれた気がつかないやり方で、そのような関係に入り込み、参加しているのだ。たとえば、論文「K is Mentally Ill (K は精神病だ)」(Smith 1978=1990:12-51) でスミスが明らかにしたように、だれかを「mentally ill」と記述することは、局所的な瞬間を精神医学によって組織される言説的諸関係の中に捕まえることなのである。

一般的な文化理論は、文化を、そのアクチュアルな実践者から——そうした実践者が、言説的に生成された主体の位置の表現としてみなされる時以外は——分離しているのだとスミスは言う (Smith 1999:158)。対照的に、ここで T-discourse とは、多様な局所的歴史的場における諸個人の活動を協働させ、秩序づけ、中継する (hook up) ヴァーチャルな関係の体系として考えられているのである⁽⁴⁾。その上でこの論説では、「イデオロギー・コード (ideological code)」という考えが提唱される。異なった論点や場に焦点が合わせられ、しばしば異なった受け手を持ち、政策や政治的実践活動へさまざまに接続される言説を調整しながら、このコードは、言説的場を横断してテキストを秩序づけ、組織するのである。ここで「イデオロギー・コード」とは、「遺伝子コード」の類比として使用されている (Smith 1999:159)。遺伝子コードは、元の配列を細胞に再生産しながら細胞に遺伝的情報を伝達する、DNA 分子の化学的構成要素の配列である。同様に、「イデオロギー・コード」は、その組織化を多様な異なる場で複製する枠型なのである。

この意味での「イデオロギー・コード」は、(仮にそのように表現されうるとしても) 決定的な概念や考えではないのだとスミスは強調する。それは、公式や言葉の確定した形式でもない。ここでイデオロギー・コードとはむしろ、テキストを書いたりトークを生み出したりする中で構文やカテゴリーや語彙を選択するための手続きや、文章を解釈するための手続きを、休み無く発生させる何ものである。それらのテキストやトークや文章は、このコードによって書かれ、話され、秩序づけられるのだ。イデオロギー・コードは、話したり書いたりする広範囲にわたる異なった場面——法的、社会科学的、行政的場面、大衆的書き物、テレビ広告、などどこでも——において、同じ秩序を生成することができるのである。

「標準的な北アメリカの家族 (The Standard North American Family : 以下 SNAF)」はこの意味で、一つのイデオロギー・コードとみなしうるのである。SNAF は、世帯 (household) を共有している法律婚しているカップルとしての「典型的な家族 (The Family)」という考え方である。大人の男性は有償労働に従事している。彼の稼ぎが家族全体の経済的基礎を提供する。大人の女性もおそらくまた定期的な収入を稼いでいるが、彼女の最も重要な責任は、夫や家庭や子どもたちのケアをすることだ。大人の男性と女性は(いかなる法的意味においても) その家庭に住んでいる子どもたちの両親である。「男性」「女性」という典型的な言葉と、その非時間的な使い方に注目すべきだとスミスは指摘する (Smith 1999:159)。このような普遍化が、SNAF という枠組のイデオロギー・コードとしての機能である。SNAF は、特定の家族と同一視することはできない。むしろ、それはどの家族にも当てはまるのである。

このコードの古典的な表明として、スミスは核家族に関するジョージ・マードックの議論をあげ

る⁽⁵⁾。そこでは核家族の普遍性を確立するため、人類学者たちによって世界の様々な地域から集められたエスノグラフィー・データのファイルに、このコードが使用された。「核家族」は、SNAFの理論的ヴァージョンである。特徴的なことには、マードックは、核家族の弁別的な形式を、エスノグラフィーの記述がそれと矛盾するときでさえ、生成することができたのである。核家族が「広く行き渡っている形式」ではない時でさえ、それは「そこからより複雑な家族形式が組み立てられるところの基本単位」になっていたのだ(Smith 1999:159)。

この点に関しては、社会生物学における以下のような記述もあげられる。

ほとんど全ての人間社会の基本的構成要素は、核家族である。アメリカ合衆国の産業都市の住民は、オーストラリアの砂漠の狩猟採集民と同様に、この単位に基づいて組織されている。どちらの事例でも、家族は、訪問(あるいは電話や手紙)や贈与交換によって第一次親族の複雑な結びつきを維持しながら、地域コミュニティの間を移動する。日中、女性と子どもは居住区域に残る一方、男性は獲物や、貨幣形式のその象徴的等価物をあさるのである(Smith 1999:159⁽⁶⁾)。

この一節において、SNAFに秩序づけられた用語、文、文の並びは、狩猟採集の形式の社会と現代のアメリカ合衆国の記述(account)を合わせまとめる。イデオロギー・コードは、非常に異なった社会からの記述要素が差し込まれうる、共通の秩序を生成するのである(Smith 1999:160)。

他方、SNAFに秩序づけられた言説を、家族の他の表象と対比させることもできる。Stackによるアフリカ系アメリカ人の近隣における親族関係のエスノグラフィーでは、家庭の境界を横断し、SNAFによって生み出された記述では記述され得ないやり方で人々を結びつける親族関係が書かれている⁽⁷⁾。たとえば、女性は一人以上の父親の子どもを持ち、全ての父親が子どもとの関係を維持していた。親族という用語は、互恵的な支援と交換のネットワークにおいて結びつけられたものを超えていた。「daddies(パパたち)」や「mommas(ママたち)」は、法的な地位によってではなく、子どもを世話することによって同定されていた。あるいは、グブリアムとホルスタインはSNAFの完全な解消を求めて、多様な文脈での、異なった目的のための、個人あるいは集団のトーク——人々が自分自身や他者(「血縁」親族とは限らない)との関係について語るトーク、人々が医療や法の場面において語るトークなど——における家族概念のさまざまな使用のされ方を探究した⁽⁸⁾。

それらの著作は、「典型的な家族(The Family)」という考え方に対応する明確な単位を探すように読者に挑む。そのようなイニシアチブは長い目で見れば普及し、ゆくゆくはSNAFと置き換わるかもしれないが、今のところはSNAFの遍在に対して辺境に位置しているとスミスは言う。実際、SNAFは、「女性が世帯主である家族(female-headed families)」などの逸脱例の同定においてもしばしば保存されている。後の議論も述べられるように、SNAFによって逸脱と定義された、男性が世帯主である家族は、ただの一つも現れてこない。あたかも、SNAFコードが、男性が世帯主である家族を生成しないからであるようだ。男性が世帯主である家族は、要するに、いかにして「秩序づけるか」についてSNAFが「知っていること」の外に置かれているのである(Smith 1999:160)。

スミスは、イデオロギー・コードが潜在的に遍在していることを強調してきた。このコードは、多様な表象の場を協働する(coordinate)ように作動するのである。次節では、イデオロギー・コードとしてのSNAFの作動の二つの例が検討される。そこにおいては、このコードの作動の異なったやり方が明示される。最初の例は、スミスとGriffithが行った母親が子どもの学校生活との関係で行うワークの研究⁽⁹⁾を組織する、SNAFの構造化する効果についての考察である。二番目はJ・W・Wilson(1987) *The Truly Disadvantaged: The Inner City the Underclass, and Public Policy*⁽¹⁰⁾ というテ

クストを読んだり書いたりする実践活動における、SNAF の効果についてである。

【読解】ここではまず、国家、官僚制、公的組織、マスコミ、科学、大衆文化など、近代社会において人々の日常生活世界を組織し規制してきた諸組織は、それぞれ独立した単位として存在し機能しているのではなく、互いに協働する社会関係の複合体を形成するようになったと指摘される。この社会関係を束ねるのが、テキストに媒介された言説であり、多様な局所的歴史的場においてテキストを活性化する人々の活動の協働である。人々は、ありふれた気づかないやり方で、テキストに媒介された言説によって秩序づけられた実践活動のアクティブな参加者になり、自らの日常生活世界を組織し規制する社会関係に組み込まれている可能性がある。そのやり方を可視化し、解明することが、スミスの社会学の主題である。

そこで着目されるのは、異なる言説的場を横断してテキストを秩序づけ組織化する、イデオロギー・コードの作用である。イデオロギー・コードとは、定式化された概念や知識それ自体というよりは、テキストを書いたりトークを生み出したりする中で構文やカテゴリーや語彙を選択するための手続きや、文章を解釈するための手続きを、休み無く発生させる何ものかとして捉えられている。このコードは、それを使って話したり書いたりする広範囲にわたる異なった場面において、同じ秩序を生成することができるのである。その実例としてこの論説では、SNAF という家族に関するイデオロギー・コードが、いかにして、社会学的テキストを書いたり読んだりする活動を組織していくのかの解明が試みられる。

ここで言われる「標準的な北アメリカの家族(The Standard North American Family)」とは、いわゆる「近代家族」「核家族」を指しているが、そうした概念それ自体というよりは、特定の家族観を普遍化しながら家族についての記述を組織する枠組として捉えられる。このコードの特徴的な機能は、たとえば、近代社会より前の生活様式と近代社会以降の生活様式を、後者を前者に包摂するかたちで同列に扱うことを可能にしたり、人々の実際の生活において観察可能な多様な親族や家族の人間関係のうち、SNAF という枠組に包摂しきれないものを「逸脱」として同定することを可能にしたりする。イデオロギー・コードとしての SNAF の作用の一つの特徴は、SNAF が「標準」になっているということそれ自体は見えなくされていることにある。親族や家族をめぐる多様な人間関係は、SNAF に包摂されることが自明視されるか、包摂しきれない「逸脱」例のみが可視化されるのである。

ここで重要なのは、一定の家族のあり方を「逸脱」とみなすことの是非というよりは、「標準」のあり方にせよ「逸脱」のありにせよ、そもそも SNAF において着目できる側面しか見えてこなくなるということだ。このような SNAF に秩序づけられた社会学的探究のある種の限界が、以下 3 節 4 節において二つの実例を通して検討されるのである。

3. 母親としての女性のワークを研究することにおける、SNAF の効果

1980 年代に、母親が子どもの学校生活との関係において行うワークに関する研究を始めた時、スミスと Griffith はまず、子どもたちの学校との関係における、シングル・ペアレントとしての自らの経験を話し合うことから始めた。実際、研究に着手すると決める前の 2～3 年以上の期間、彼女たちは、この関係から生じる信頼、不満、みじめさ、罪悪感を共有してきたという。

より体系的な議論をすることでスミスたちは自分たちの問題を、学校と関連して「欠陥のある家族」であることの問題、すなわち、学校システムの専門的イデオロギーによって適切と定義されている親役割の標準に何らかのやり方で達しない家族の問題、として定式化するに至った。そして、

自分たちのような家族がどのように不完全なのかを理解するためには、「標準的(normative)」あるいは「完全な(intact)」⁽¹¹⁾家族が学校との関係でどのように作動しているかをもっと知る必要があると判断した。『標準的家族』と学校との関係についてもっと学びたいと思ったし、そのような家族における女性たちが子どもたちの学校生活との関係で、そしてまたおそらく学校のために、行っている仕事に焦点を合わせたいと思った(Smith 1999:161)」のである。

彼女たちは——フェミニズムが勧めるように——まず自分たちの経験から始め、スミスが「問題としての日常生活世界」(Smith 1987)について提出したいくつかの概念とともに仕事をした。したがって、そこでの研究のレリバンスは、社会学や教育学の理論によって構造化されてはいなかった。と同時に、仕事が進むにつれ彼女たちはだんだん、自分たちの考えや経験の語りテキストに媒介された言説によって構造化される、ありふれたやり方に気づくようにもなったという(Smith 1999:161)。学校についての彼女たちの関心、彼女たち自身の経験、女性の無償労働についての彼女たちのフェミニスト的関心は、テキストに媒介された言説(T-discourses)に埋め込まれていたのである。

テキストに媒介された言説は、徹頭徹尾 SNAF に感染していた。彼女たちの研究も同様であった。このことは多くの点で、しだいに可視化されていったという。たとえば、そもそも、インタビューする家族の選択が SNAF に規定されていた。「完全な家族」のサンプルを探し求める中で、自分たちはイデオロギー・コードと家族の実際の現実(working reality)を混同していたのだとスミスは振り返る(Smith 1999:162)。あたかも「完全な家族」と学校との社会的に組織された諸関係の中にコードの論理を「発見」できるかのように、あるいはそれらの関係を標準形式の「現れ」として扱えるかのように考えていたのである。ここでは、マードックが SNAF に規定されてファイルから核家族を抜粋した時に使用したのと同様の、秩序づける手続きが作動することになったのである。

時には「データ集」を修正するには遅すぎることもあったが、スミスらは、自分たちの考えと研究計画が、後にマザリング・ディスコース(mothering discourse: 母親の子育ての言説)と呼ぶことになるものに深く構造化されていることを、骨を折りながら学んでいったという。北米のマザリング・ディスコースは、歴史的には、20世紀の最初の20年間に発展した。それは、心理学者や子どもの発達に専門家によって生み出された研究や思考によって活発に供給され、女性雑誌やテレビ番組や他の大衆的メディアにおいて広く普及されている。この言説の重要な側面は、公的な教育システムを促進するために女性たちのワークと思考の協力を求めながら、子どもの学校生活と女性たちの関係を「管理」していくことにある(Smith 1999:162)。

北米の女性たち、とりわけ中産階級の女性たちは、この言説の初期の発達に深く関わっていた。主婦(housewife)として母として、彼女たちは、女性雑誌や子どもの発達と子育てに関する本を読み、自分たち自身や、子どもたちや、自分が行うであろうことと学校での子どもの成功の関係を解釈するための指導やアイデアや基準や枠組を得てきた。そのことをとおして彼女たちは、テキストに媒介された学校—母親の言説(school-mother T-discourse)に参加し続けたのである。マザリング・ディスコースは、SNAF として単純化できるわけではないが、徹頭徹尾 SNAF に秩序づけられており、実際歴史的に、英語を話す北米全体に、一般化された SNAF を運ぶ担体の一つとなってきたとスミスは指摘する。

共同研究者の Griffith が 1984 年の博士論文で教育的文脈における一人親家族のイデオロギーを研究してきたことを考慮すれば、自分たちの研究が SNAF に侵略されている範囲の広さは悩ましいものだったとスミスは振り返る。Griffith は、子どもの発達や社会心理学の言説において、「シング

ル・ペアレントの家族(女性が世帯主である家族)が子どもに与える影響」なるものが作り出されることを探究した。ここでは、シングル・ペアレントの家族であるということが、いかにして教師たちに、教室で観察できることから「欠陥のある」家族へと読み戻す(read back)手続きを与えるかが示されたのである。Griffithの研究では、いかにして教育行政において、教師たちの専門的記述において、ニュース・メディアにおいて、SNAFという概念が作動しているのかも示されていた(Smith 1999:162)。にもかかわらず自分たちが研究に乗り出した時、自身の考えや研究デザインがマザリング・ディスコースによって、そして標準的な北アメリカの家族(SNAF)という考えによって、どれだけ組織されているかについて留意することができなかつたのである。

スミスの言うイデオロギー・コードとは、必ずしも、概念の一定のセットや概念体系、あるいは、一定の内容に託されるわけではない。このコードは、その組織化(organization)を言説的なテキスト(スミスらが行ったインタビューも含む)において再生産するが、それは特定の用語を使用して表される必要はないのである。たとえば、スミスたちは決して「核家族」のような概念を考えていたわけではなく、むしろ意識的に避けてさえいたという。

1920年代以降北米で繁栄したマザリングについての言説は、SNAFに秩序づけられていた。したがってまた、専門的教育者による、家族についての補足的言説も同様だった。James Colemanが行ったような教育の社会学的研究⁽¹²⁾もまた、徹頭徹尾 SNAF に構造化されていた。そして、わたしたちの研究も同様だったのである(Smith 1999:163)。

学校—母親のテキストに媒介された言説(school-mother T-discourse)は、個々の子どもの学校での達成、あるいは大人としての彼／彼女の成功さえ、その第一の責任を家族に帰する。SNAFは、実践的な場面において、「家族」を「母親」に翻訳する解釈を可能にする。「完全な」家族とは、学校のためのワーク——それは家庭の中で見えないように行われる——をするために子どもの母親を利用できる、ということの意味する。Griffithがシングル・ペアレントの家族のイデオロギーについて示したように、テキストに媒介された学校—母親の言説は、学校での子どもの行動から家族における原因へと読み返す、そして家族の問題の知識から学校での子どもの行動の解釈へと読み戻す、読みのドキュメンタリー・メソッドを、学校や教師に与えるのである(Smith 1999:163)。

ここでスミスは、マンハイムの議論に依拠しながら、テキストに媒介された学校—母親の言説の作動の仕方を考察する。解釈のドキュメンタリー・メソッドは循環的過程である。一方で、わたしたちが見聞きするものは、根底にある(underlying)パターンや枠組との関係で解釈される。他方で、根底にあるパターンや枠組は、私たちがものごとを注目するやり方や、見たり聞いたりするやり方を選択し、秩序づける。テキストに媒介された学校—母親の言説は、両方のやり方で作用するのである。スミスとGriffith(そしておそらく他の母親たちも)、教師たち、カウンセラー、彼女らの子どもたちの学校の校長は皆、この解釈的循環がどのように作動するかを知っていたのである。

スミスとGriffithは学校で、「欠陥のある」家族とみなされていた。「欠陥のある」家族は、「欠陥のある」子どもを生み出す。スミスらの子どもが学校で起こすであろうどんな問題も、根底にある解釈プログラムとしての「欠陥のある」家族を指し示す。彼女らはいつでも有罪だったのだ。

SNAFは、私たちと学校の関係、学校と私たちの関係、学校と私たちの子どもたちとの関係を協働した。そして子どもたちは、子ども向けの読み物からSNAFを学ぶ。私の下の息子は、ある日学校から帰ってくるなり「うちの家族には何かとてつもない間違いがあるよ」と言ったのだ(Smith 1999:163)。

子どもの学校に関してシングル・ペアレントであるという、SNAFに構造化された自身の経験は、自分たちの研究に強力な影響を及ぼしたとスミスは振り返る。SNAFに一致する家族がいかにして学校とともに働くのかというスミスらの関心は、子どもたちが通っている学校に関して「欠陥家族」であったという自身の経験から生じていた。これは、古典的な、SNAFの読みの手続きである(Smith 1999:164)。研究を始めた当初インタビューのトピックを設計していた時には気づいていなかったことが、今となっては認識できるとスミスは言う。インタビューの設計において、テキストに媒介された学校-母親の言説が作動していたのである。学校生活(school day)の典型的な特徴というトピック、母親たちはいかにして子どもの宿題につきあうのか、学校行事に彼女たちが果たす役割は何かなどは、テキストに媒介された学校-母親の言説におけるスミスたち自身のありふれた能力によって生み出されていた。このテキストに媒介された言説へのスミスたち自身の参加、この言説がインタビューのトピックの一覧をいかにして組織したかということは、研究のずいぶん後になってふとしたことから見えるようになったのである。

SNAFが最も明確に作動したのは、おそらく、インタビューが女性の雇用を扱った時だったろうとスミスは言う。スミスと Griffith および彼女たちが話した女性たちのほとんどが、少なくともこのインタビューの目的に関して、家庭の外で雇用されることは幼い子どもをもつ女性にとって「標準」ではないということを目明視していた。家庭の外で働いているインタビューの回答者は、いかに自分が子どもの世話や例外的な経済状況(そのために彼女たちはこのインタビューを求められているのだが)をやりくりしているかを注意深く記述した。インタビューを行う側(そこにはスミスと Griffith と大学院生の3人がいた)は時々、女性たちに雇用についてたずねる時非常にためらいがちになり、以下の例のように家庭の外で働くことを「標準化」するよう気をつけたという。

スミス: はい、それで、私たちがまず話したい最初のことがらは・・・というのも、家庭の外でパートタイムで働く母親も、フルタイムで働く母親も、家庭の外で働かない母親もいるということがわかってきていますので、いったん背景から始め、それから先に進んでもよいでしょう。それで、あなたは家庭の外で働いたことがありますか?(Smith 1999:164)

SNAFはまさにここで作動している。家庭の外で働く女性を他の女性が行っていることの観点から標準化する記述は、幼い子どもをもつ女性にとって賃金をもらって働くことは標準的な完全な家族からの逸脱であることを認識している、ということだ。家庭の外で雇用されることを「普通」として再定義している質問の導入部は、それを「逸脱」として定義する SNAF の秩序づけに暗黙のうちに応答しているのである。

SNAF の効果は、スミスらの研究設計を制限したわけではなかった。スミスたちがインタビューした女性たちのうち、ほとんどとはいわないまでも多くは、同様に、母親-学校の言説の解釈枠組を使って作動していたのだ。彼女たちは、スミスらが質問票を書いたり回答者の答えを解釈したりする際に使用したまさにその解釈枠組に指向していたのである。スミスらがどう質問し、その答えに対してどう応答したかは、インタビューを受けた女性たち自身が使っていた方法(ドキュメンタリー・メソッド)についてのスミスらの解釈能力を示していた。他方、女性たちの答えをその方法の指標として見出した時に、スミスらは、彼女たちの答えに一定の意味を見出すことが可能になったのである(Smith 1999:164)。

インタビューを受けた女性たちは、マザリング・ディスコースの参加者であったのだ。彼女たち

は能力をもっていた。つまり、テキストに媒介された母親—学校の言説の枠組を使用しながら、自分たちの生活について言及し解釈するやり方を知っていたのである。スミスと Griffith が女性たちのワーク実践に焦点を合わせたオープン・エンドなインタビューを使用したことは、SNAF によって完全に拘束され変形されているわけではないワークの記述を得たことを意味する。そしてもちろんスミスらは、自分たちの前提がアクチュアリティから挑戦を受けるように、学校との関係で母親が行うワークが組織される実際のやり方を解明することに専心してきた。にもかかわらず、スミスらによるインタビュー・データ(質問と応答の両方を含む)の分析は、いかんにしてそのデータが学校—母親言説やその言説の中で作動する SNAF コードによって組織されているかという問題にとりかからざるをえなかったのである。

【読解】この節では、「母親が子どもの学校生活との関係において行うワーク」を研究するためにスミス自身が 1980 年代に行った、社会学的調査の局所実践活動における SNAF の効果について考察されている。社会学的な知識の産出には、無限の多様性を含む個別具体的な人々の生活のアクチュアリティを、「客観化された知識」としての「社会的なもの」に変換する過程がある。ここでスミスらは自らの経験を元に、子どもの学校生活における「シングル・ペアレント」の問題——学校と関連して「欠陥のある」家族であることの問題——を同定した。そして、自分たちのような家族がどのように「不完全」なのかを理解するため、子どもの学校生活との関係で「完全」な家族(=母親)が学校のために行っているワークを明らかにするという問いを設定したのである。

この問いは、社会学や教育学の理論といった「客観化された知識」からではなく、自分たちの日々の生活における実際の経験から見出されていた。それゆえスミスらは、自分らの問いが、SNAF をイデオロギー・コードとするマザリング・ディスコースによって構造化されているとは考えていなかった。しかしながら、SNAF は、日常生活と切離されたテキストの中のみ存在するわけではなく、実際に子どもの学校生活と日々関わっている母親たちの経験を組織する枠組として作動していたのである。彼女たち(そしておそらくその子どもたちも)は、日頃から、SNAF を使用して、自分たちの生活について言及し解釈するやり方に習熟していた。スミスらを含め「シングル・ペアレント」の母親たちは、ありふれた気づかないやり方で、テキストに媒介された言説によって秩序づけられた実践活動の参加者となり、自らの日常生活世界を組織し規制する社会関係に組み込まれていったのである。

SNAF というイデオロギー・コードと実際に教室で起こっていることの解釈には、循環的な関係にあった。教室における子どもの「問題」行動から、SNAF の要件を満たさない「欠陥のある」家族の「問題」が発見された。と同時に、そもそも教室での子どもの言動のどこに注目すべきか、何を問題にするべきかを秩序づけるのは SNAF であった。テキストに媒介された学校—母親の言説は、教室での子どもの問題行動から、「シングル・ペアレント」という「欠陥のある」家族の問題へと読み返す方法を、教師たちや母親たちに与えていたのである。

スミスらは、そもそもマザリング・ディスコースに対して批判的であった。だからこそ、幼い子どもをもつ母親が家庭の外で雇用されることを、あえて「標準化」しようと気を配った。しかしながら、まさにそのことが、逆説的に、SNAF を「完全な」家族とするものの見方を支持していたことには無自覚であった。イデオロギー・コードは、「近代家族」や「核家族」のような概念のものではない。テキストに媒介された学校—母親の言説は、個々の子どもの学校での達成、あるいは大人としての彼・彼女の成功をも、その第一の責任を家族、とりわけ母親に帰するように作用した。そのため、スミスらもまたインタビューの設計において、子どもの学校生活に母親がどのように関わって

いるのか、という点にしか着目できなかったのである。

スミスらが苦勞して気がついたのは、問題は、SNAFが可視化する「欠陥のある」家族にあるのではなく、そもそも家庭における母親の見えないワークを利用し学校教育を補完させる、公教育のあり方にあるということだ。SNAFが「完全な」家族とされ、シングル・ペアレントが「欠陥のある」家族とされること、とりわけ幼い子どもをもつ女性にとって家庭の外で賃金をもらって働くことが「逸脱」とされるのは、家庭で子どもの学校教育の支援をすることが自明視されているからこそである。仮に、母親が有償労働をするのは「普通である」と再定義されたとしても、家庭における母親のワークが教師の教室におけるワークを補完することを前提として成り立っている学校教育のあり方自体が問われなければ、教室での子どもの困難は解消されない。SNAFは、「完全な」家族なるもののあり方に疑問を差し挟めなくするとともに、教室での教師のワークと家庭での母親のワークの協働において何が起きているのかを不可視にするのである。

4. 「アフリカ系アメリカ人の家族」を読むこととしての SNAF

アメリカ合衆国のインナーシティー⁽¹³⁾におけるアフリカ系アメリカ人の貧困と諸問題の研究において、W・J・ウィルソンは「完全な(intact)」家族と「完全ではない(nonintact)」家族を区別する。SNAFに規定された家族の記述は、大人の男性の世帯主が欠けた家族を、男性の世帯主を持つ標準的な完全な家族からの逸脱として表象する。ウィルソンによる完全でない家族とは「女性が世帯主の」家族である(Smith 1999:165)。アフリカ系アメリカ人の家族についての先行する社会学的研究に反論して、ウィルソンは、合衆国におけるアフリカ系アメリカ人の人口を特徴づけると考えられる完全でない家族は、奴隷制の結果でも、伝統的な家族形態の残存でも、福祉政策の影響による福祉依存でもないと主張する。むしろそれは、アフリカ系アメリカ人の男性の失業による貧困の結果だと言うのである。

20世紀の初め、黒人であれ白人であれ、所得の低い家族の大多数は完全(intact)だった(Wilson 1987:90=Smith 1999:165)」とウィルソンは述べる。女性が世帯主である、完全でない家族がアフリカ系アメリカ人の人口に不釣り合いに集中していることは、アフリカ系アメリカ人の男性が職を見つける際に相対的により困難であることの影響だとされる。「アメリカ合衆国における貧困が黒人の家族に不釣り合いに集中しているとすれば、かれらは白人より[貧困、黒人男性の死亡率の高さ、仕事を探して男性が旅に出る必要があること]などの条件によって強く影響されており、したがって、白人の家族より女性が世帯主になりやすいのである(Wilson 1987:64=Smith 1999:165)」。つまり、「よい」完全な家族が、「悪い」条件によって損害を受けているということである(Smith 1999:165)。

ウィルソンの記述において、SNAFコードは、テキストを構造化する鍵となる装置であるとスミスは指摘する。合衆国のアフリカ系アメリカ人の人口において、「完全な」家族から女性世帯主の家族へと多数派が移動していることは、普通の形式からの逸脱、あるいは損害を受けた形式への移動として解釈されている。家族や経済における男性支配の理論が、明確に表明されることなく分析に輸入されているのだ。SNAFは、「完全な」家族のような概念を生成しながら、その逸脱した形式である「女性が世帯主である」家族という概念とともに、舞台裏で静かに作用しているのである(Smith 1999:166)。

このコードが作用することで、別の構造化する装置——たとえば、失業と貧困の議論の文脈で、男性と女性を並行して扱うような——が抑圧される。SNAFが支配する(rule)時、その構成要素で

あるジェンダーの差異化がテキストの中で作用するのである。ウィルソンの著作において、アフリカ系アメリカ人の人口において「欠陥のある (defective)」(「女性が世帯主の」) 家族の割合の増加が 20 世紀に出現することについての章では、女性だけが扱われている。SNAF コードは、統語論的に前提とされた関係のみならず語彙をも選択する慣習のセットとして作動しており、「完全な」家族の減少と「女性が世帯主の不完全な」家族の増加の主人公として、女性を選択する。妻と分離された男性たちは視界から消えるのだ (Smith 1999:166)。男性たちが自分の子どもたちと現在進行中で関係を持ち続けていることを示唆するデータも存在するにもかかわらず⁽¹⁴⁾、SNAF コードを用いてこのテキストを読む読者はそのことを知ることができないのである。

このテキストでは、文章に男性と書いても同等に適切であろう所でさえ、女性が好まれているとスミスは指摘する。たとえば「白人の女性では別居より離婚の方がはるかに起こりやすいが、黒人の女性では離婚よりも別居の方がより起こりやすい。実際驚くことに、結婚している黒人女性全体の 22% が、夫と別居しているのである (Wilson 1987:68=Smith 1999:166)」という文章がある。この文章は、「白人の男性では別居より離婚の方がはるかに起こりやすいが、黒人の男性では離婚よりも別居の方がより起こりやすい」のように記述することも可能だったのであろうとスミスは言う。しかしここで SNAF が秩序づける手続きは、主人公として、男性よりも女性を選択する。対照的に、失業がアフリカ系アメリカ人の「完全な」家族の浸食を助長していることについての章では、ほとんど男性だけが扱われている。アフリカ系アメリカ人の女性の失業や低賃金の問題が、アフリカ系アメリカ人の貧困を助長していることには焦点が合わせられないのである (Smith 1999:166)。

「典型的なアフリカ系アメリカ人の家族 ('the' African-American family)」という SNAF に秩序づけられた像をまとめ上げる際に、ウィルソンは、U. S. Bureau of Census や National Center for Health Statistics などの機関が出した統計データに依拠していた。これらのデータは SNAF の規範的な中味を複製するものではないが、骨格の形式においてその秩序を保存している、とスミスは指摘する。この点について彼女は、サンフランシスコにおける「記録されていない移民 (undocumented immigrant)」の国勢調査を評価するために、Mary Romero が行ったエスノグラフィー的研究⁽¹⁵⁾を取り上げる。

ここで Romero は、およそ 105 戸から成るある国勢調査の区画——多民族ではあるがヒスパニックが支配的な地域——に住む人々の既に回収された国勢調査のデータと、戸別訪問の調査で学んだことを比較している。それによれば、国勢調査のカテゴリーと手続きは、各戸に住んでいる人々の実際の世帯構成を著しく誤って解釈していたという。典型的な歪みは、SNAF に秩序づけられたカテゴリーや枠組や手続きを、SNAF に秩序づけられていない状況に適用した結果として理解できるとスミスは指摘する (Smith 1999:167)。

SNAF の歴史的効果は、「世帯主」の枠組上の同等物を明示することが必要とされる時に可視化される。かつては、世帯主が指名されるべき時には、女性より男性が優先された。今日では、その人の名前が家を所有したり借りていると同定される、一人の個人が指名されるであろう。世帯の他の成員の身分は、この人物との関係で定義されなければならない。世帯の成員は世帯主という地位を与えられている人物との関係で同定されなければならないので、住宅を共有している他の家族は誤って表象されるかもしれない。国勢調査の用紙の中で、世帯主と指名されている人の配偶者でも、子どもでも、親でも、兄弟でもない家族の成員のために利用可能なカテゴリーは、「下宿人」だけであるようにみえる (Smith 1999:167)。

Romero は、一つの家を複数の家族が共有している事例をみつけた。しかし国勢調査では、中心

の位置が与えられるのは一人の個人だけであり、他の全ての人は、中心の位置を与えられた人と関係していなければならない。さらに、この用紙において利用可能なカテゴリーの数は、住居にいる全ての人を記録するには十分ではない可能性がある。複数の家族が住んでいる住居は市営住宅の規則(これもまた SNAF に制御されているかもしれない)に違反しているため、国勢調査が何らかのやり方でそのことを行政にもらすのではないかと恐れる大家は、各戸が一家族だけで居住されていると確実に用紙に記入されるよう、干渉するかもしれない。この事例は、SNAF によってデザインされたデータ収集の装置が、SNAF を再生産する人口の表象を生成している可能性を示唆するものである (Smith 1999:167)。

ここでスミスが言っているのは、たとえば、完全(non-intact)でない家族が完全な(intact)ものとして表象されている、ということではない。むしろここでは、データが SNAF に従って秩序づけられていることが指摘されているのである。データが SNAF に従って秩序づけられ「うる」ところでは、それはそのように秩序づけられるだろう。そうできないところでは、SNAF は——ウィルソンの著作でしたように——「逸脱事例の生成を秩序づける」のだ。前述の Stack によって記述されたような、他の次元の親族関係は、国勢調査のカテゴリーから完全にもれており、決して視界には入ってこないのである (Smith 1999:167)。

ウィルソンが依拠した経験的基盤は、エスノグラフィー的なものではない。それは大部分、国勢調査や他の政府機関のデータからのものであった。彼が取り上げた研究も、同様のデータに基礎を置いていた。したがって、彼の議論の経験的基盤はすでに SNAF によって秩序づけられていたのだと、スミスは指摘する。その上で、ウィルソンの SNAF に制御された(governed)の物語に対する根本的な代替として、フェミニスト人類学者 Henrietta Moore の議論を取り上げる。スミスによれば、Moore の議論は、女性が世帯主の家族は、貧困の結果として見なされるべきではない(したがって、何らかのやり方で「損害」を受けたものとして見なされるべきではないことがほめかされる)ことを示唆する。自身のアフリカでの経験を引き合いに出しながら Moore は、「結婚を選択しない女性もいる・・・そして・・・結婚しているかなりの数の女性は、夫と別々に生活することを選択する (Moore 1988:64=Smith 1999:168)」と述べている。

そのような選択は、北米の女性によってもなされているだろう。そしてもちろん、そのような選択と貧困の間には関係があるだろう、とスミスは指摘する。先述の Stack(1974)によって記述されたパターンは、異なる男性による複数の子どもをもつという女性の選択が、経済面で実践的に役に立つことを示唆している。明らかに、父親は自分の子どもとの進行中の関係をもっている。したがって、複数の子どもと女性から成る世帯は、親族の接触の範囲を広げ、結果として潜在的な経済的支援の範囲を広げていると考えられるのである⁽¹⁶⁾。世帯と親族の接触を最大にする家族や親族の関係のパターンは、貧困という条件においてよい意味を持つのだ。女性が自立して子どもや自分自身を養う能力を持つことは、特定の男性への依存を回避することによって高められるであろうし、世帯間のつながりや支援を生み出すコミュニティの関係への参加も促すだろう。このような家庭の経済パターンが「欠陥」として現れるのは、SNAF に秩序づけられた用語において再度記述(re-present)された時だけである。

Stack(1974)によって記述されたような家族のパターンが SNAF に秩序づけられて表象されるとどうなるかは、「欠陥のある」家族の形式が世代内で再生産されていると論じるテキストにおいてよく現れている。それは以下のようなものである。

シカゴにおける黒人の10代の若者の結婚前の妊娠の確率に、家族の背景、家族成員の特徴、社会的環境がどのように影響しているかについての、HoganとKitagawaによる分析は、以下のことを示す。不完全な家族、低い社会階級、貧困、高度に隔離された (highly segregated) 地区の若者たちは、他と比べて、出生率がきわめて高かった。HoganとKitagawaは、高リスクの社会環境(階級が低い、貧しいインナー・シティーの地区に住んでいる、女性が世帯主の家族である、5人以上の兄弟姉妹がいる、10代で母親になった姉が一人いる、デートに対する親からの監督がゆるい)の10代の少女の57%は18歳までに妊娠しているが、これに比べて低リスクの社会背景の少女は9%だけだったと見積もっている (Wilson 1987:75=Smith 1999:168 強調はスミス) (17)。

ウィルソンは、「女性が世帯主の家族」や「婚外の出産」を、適切な普通の状態からの混乱 (dislocation) として書いている。これらは両方とも、SNAFに制御された逸脱の形式であるとスミスは指摘する。上記の文章にある、低リスク、高リスクという概念は、この概念的軌道に従っているのである。

高リスクの社会環境、つまり、若い女性が「婚外の」子どもを産むリスクが高い社会環境は、「女性が世帯主である家族」を含むものだ。しかし、StackやMooreの研究から示唆される、人々の日常生活のアクチュアリティにおいては、混乱というよりは、厳しい条件下で相互の経済やその他の利益の範囲を最大にする社会的組織化を見出すことができるかもしれない。ウィルソンの引用においてスミスが強調した項目——女性が世帯主の家族である、5人以上の兄弟姉妹がいる、10代で母親になった姉が一人いる——が示すのは、世帯と親族の接触を最大にする家族や親族の関係のパターンを、SNAFによって濾過することで出てきた指標であるかもしれない。また、SNAFは家族と世帯を等価していることにも注目すべきである。ウィルソンも、HoganとKitagawaもそうしている。それゆえに、ここでは世帯内のつながりが表に現れてこないのである (Smith 1999:169)。

まったく異なった言説的、行政的場におけるSNAFの作動が、いかにしてウィルソンの記述のテキスト内現実を規定しているかを理解し始めることができる。ウィルソンのSNAFに制御された理論化や彼が引用した研究は、ほとんどの部分、SNAFに制御された政府の統計に依拠しており、それらを資料とした分析によって妥当性を認められている。それらの研究と統計は互いに独立しているにも関わらず、両者を生成する秩序づける手続きは同じである。政府の統計は、ウィルソンのために作られたものでも、彼の研究や彼が引用した研究にはめ込まれたものでもない。にもかかわらず、それらは、ウィルソンが呼び寄せることのできた、きわめて多くの研究の共通の経験的基盤を確立したのである。

イデオロギー・コードとしてのSNAFの作動は、データ・ベース、ウィルソンが引用した研究、ウィルソン自身の議論の間の概念的同形を創出しているのである。ウィルソンのテキストの経験的「堅固さ」は、このことに依存している。それゆえ、アフリカ系アメリカ人の人口において「欠陥のある」(「女性が世帯主の」) 家族の割合の増加が20世紀に出現することについての章で、ウィルソンが以下のように結論づけることができるもの、不思議なことではないとスミスは言う。そこでは、「利用可能な証拠は、黒人の間では男性の失業が女性世帯主の家族の人口の増加と関係している、と主張することを支持している (Wilson 1987:83=Smith 1999:169)」と述べられ、さらに政策的含意について「・・・利用可能な証拠は、貧困家族の崩壊と、黒人男性が安定した雇用を得られる見込みの間の関係について、再び新しく学問上、公共政策上の注意を向けることを正当化する (Wilson 1987:90=Smith 1999:169)」と結論づけられるのである。

【読解】この節では、すでに専門的学問的言説において構築された「社会的なもの」を前提として社

社会学のテキストを読んだり、新たなテキストを書いたりするワークについて、W・J・ウィルソンの研究を題材に考察されている。ここでは、女性が世帯主の「完全ではない」家族の増加が、アフリカ系アメリカ人の人口に不釣り合いに集中しているという「問題」が「発見」される。この「問題」は、アフリカ系アメリカ人の男性が職を見つける際の困難と関連づけられる。そもそも20世紀初めまでは、所得の低い家族の大多数も「完全な」家族であった。しかしながら、男性の失業や貧困という悪い条件によって、「完全な」家族が損害を受けている。これが「問題」なのである。黒人男性の不安定的な雇用と、貧困家庭の「崩壊」の関連にもっと注目する公共政策の必要性が、結論として導き出されるのである。このような社会学的テキストの中に、スマスは SNAF の作動を見出す。

「女性が世帯主の家族」や「婚外の出産」が適切な普通の状態からの「逸脱」とされるのは、主たる稼ぎ手であるはずの夫や父の「欠如」が見出されるからである。母親が稼ぎ手である可能性、同居しない父親が子どもたちと関係を持ち続けている可能性は視界に入っていない。女性が世帯主の家族の貧困対策として、男性の失業や低賃金の問題に焦点が合わせられる。これは、女性に稼ぎ手としての夫を与えるという発想であり、女性自身の失業や低賃金の問題は視野に入っていない。他方、SNAF に秩序づけられていない別の記述が示唆するのは、アフリカ系アメリカ人の女性が子どもの父親と別居し自ら世帯主になることは、貧困の結果ではなく、むしろ厳しい状況を生き抜く生活の知恵とみなすこともできるということだ。彼女たちは、特定の男性への依存を回避し、自立して自分自身を養う能力を持っている。複数の親族関係を構築し、世帯間の接触を活発にすることにより、厳しい状況下で相互の経済的・生活的支援を生み出すコミュニティの範囲を広げている。ここには、SNAF が想定しない別次元の親族関係の存在が示唆される。しかしながら、SNAF に秩序づけられた用語において再記述される際には、このコードが想定しない上記のような家庭の経済パターンは「欠陥」としてしか表象されえないのである。

さらにここでは、ウィルソンが「典型的なアフリカ系アメリカ人の家族」の像をまとめ上げる際に依拠した国勢調査や政府機関のデータそれ自身が、SNAF 制御されている可能性も指摘される。国勢調査が基本単位とする「世帯」の捉え方が、そもそも SNAF に秩序づけられているのである。国勢調査の用紙の中で、住宅を共有している人々は、「世帯主」という地位を与えられている一人の人物との関係で同定される必要がある。そこでは、同一世帯に複数の親族関係が混在していることも、親族関係以外の人が存在することも想定されていない。この用紙の中で利用可能なカテゴリーの数は、住居にいる全ての人を記録するには十分ではない可能性がある。しかしそのことは、通常は、不問に付される。人々は、自らの生活の局所的なアクチュアリティを、公的な文書におけるカテゴリーに包摂させるよう、なんとかやりくりして用紙に記入していくのである。SNAF によってデザインされたデータ収集の装置が、SNAF を再生産する人口の表象を生成している可能性を、スマスは指摘するのである。

SNAF というイデオロギー・コードは、ウィルソンの社会学的テキストと、全く異なった言説的、行政的場において作成された他のテキストを協働させる。ウィルソンが依拠した統計や引用した他の研究もまた SNAF によって秩序づけられており、彼の分析の経験的基盤を与えている。SNAF は、異なる言説的場を横断してテキストを秩序づけ組織化し、それを使って話したり書いたりする広範囲にわたる異なった場面において、同じ秩序を生成することができる。「不完全な」家族の問題が社会現象として現れてくるのは、人々の個別具体的な毎日毎夜の生活で起こったことを、SNAF というイデオロギー・コードを使って濾過していく institutional な諸活動の協働の産物なのである。

5. イデオロギー・コードを媒介にした諸活動の協働

生物学者が遺伝子コードの作動の観察を行えるのと同じように、テキストに媒介された社会関係という現象の観察を行うことは可能である。分子レベルの生物学的観察を媒介するようなテクノロジーは必要とされないが、これまでの議論をとおして記述されたことがら「観察された」特徴である。すなわち、T-discourse の社会的組織化を社会学の主題として探究することができるし、多様な場(テキストに関係するトークを含む)を協働する手続きを同定し、その「効果」を分析することができるのである(Smith 1999:169)。スミスは、社会組織の解明における因果論的を避けるため、通常は「効果(effect)」のような概念は使用しないという。にもかかわらず、「効果」という用語がここで適切であるようにみえるのは、考察されたイデオロギー・コードが大部分、研究者や書き手の意識的意図の外で作用するからである。このことは、本稿3章で述べた、母親業(mothering)と学校生活(schooling)についての研究におけるスミス自身の経験の詳細な例証で示されていた。4章で取り上げたW・J・ウィルソンもまた、彼の政治的プロジェクトに役立つからという理由でアフリカ系アメリカ人の家族のSNAFによって設計されたヴァージョンに決めたわけではない——実際は役に立つにせよ——だろう、とスミスは指摘する。

SNAFという設計図(the SNAF design)は、モイニハン報告⁽¹⁸⁾が始めたアフリカ系アメリカ人の家族についての現在進行形の論争において——この論争は徹頭徹尾SNAFに秩序づけられている——、あるいはその後、社会学や子どもの発達や教育などの学問で産出された家族についての広範な文献において、すでに手元にあったのである。おそらく、そのようなイデオロギー・コードは、それに感染したT-discoursesに私たちが読み手として参加する時に、私たちの思考に組み入れられる(incorporated)のだろう(Smith 1999:170)。

SNAFに制御されたテキストと、国家機関によって集められ与えられる統計をとおしたSNAFに制御された社会の表象との協働が、ウィルソンの著作のような、疑似現実(simulated realities)のテキスト内産出を準備する。ここで注目されるのは、独立した場が言説的に協調している(discursive concerting)、ということである。イデオロギー・コードは、言説の産出を秩序づける以上のことを行う。概念的同形に依拠しながら、ある種の中継地点(interchange)を準備するのである。先述したE・ウィルソンの社会生物学の引用において、狩猟採集社会の(彼のヴァージョンの)家族組織と、今日のアメリカの(彼のヴァージョンの)家族組織が並列されていたように、用語や文章を生成する秩序づける手続きが同じところでは、異なる内容が並列されうるのである。W・J・ウィルソンの研究においては、アフリカ系アメリカ人の家族についてのSNAFに秩序づけられた彼の見解は、SNAFによって生成されたU. S. Bureau of Censusのデータと直接的に協働している。統計が彼の見解を実現し表現する一方、彼の見解が統計を解釈するのである(Smith 1999:170)。

イデオロギー・コードの以上のような観察は、スミスが使用した分析戦略に基づいているとともに、その分析が解明する経験——調査を行ったり、社会学を読んだり書いたりする経験——に基づいている。観察は、言明の不活性な運び手としてのテキストへの注目のみならず、言説の中の一連の行為——W・J・ウィルソンの書いたようなテキストを読む、子どもの学校生活との関連における母親のワークの研究でスミスたちが行ったように、テキストと研究の実践活動を行ったり来たりする——という／における経験に依拠しているのである。

ここで私は、前述の分析がウィルソンのテキストを読むという経験に基礎を置いている、ということ強調したいのではない。しかしそれは、彼のテキストで出された主張にフェミニストとして抵抗すると同時に、にもかかわらずそのような留保の根拠をテキストの中には見出せなかった自分自身に気づくという、独特な読みの経験であったのだ。この困難は、もちろん、自分が白人であるということ、したがって、アフリカ系アメリカ人の男性によるアフリカ系アメリカ人の生活についての権威ある記述と論争する権利はないという感覚によって、さらに増した。ウィルソンの疑似現実、私たちの研究に侵入したのと同じスキーマによって組織されているということを理解するようになった時、私は、両方の場における SNAF という同じイデオロギー・コードの作用を特定することができるようになったのだ(Smith 1999:171)。

SNAF に感染したテキストは、いたるところに存在する。それらのテキストは、あるひとつの「家族(The Family)」のヴァージョンに、言説的なかたち(body)と内実(substance)を与える。この「家族」のヴァージョンは、人々の生活のアクチュアリティを覆い隠し、SNAF に一致しない世帯内の共同生活のやり方や経済的感情的支援関係を形成するやり方についての記述に、暗黙の評価を挿入するのである(Smith 1999:171)。別のやり方を概念的に封じ込めることは(conceptual containment) 政治的には非常に重要なかもしれない、とスミスは指摘する。話すことや書くことが——イデオロギー・コードの特性を議論している時にさえ——しばしばこのコードによって制御されているのではないかと疑っているのである。

SNAF はまた副産物として、母親が世帯主である家族の欠陥のある特徴を肯定する統計データを生成しながら、福祉行政のための法を設計し、行政機関を協働する。したがって、イデオロギー・コードは、世界の表象の様式を——そうしたコードが生成する表象に公然と抵抗する人々の間にさえ——繰り越しながら、独特の重要な政治的力を持つ可能性がある。スミスたちが、社会科学の読み手・書き手としての、あるいは、T-discourse の参加者としての自身の能力によって、気づかぬうちに自分たちが反対していた言説的ポリティクスを再生成する状況に置かれてしまったように、である。

【読解】イデオロギー・コードが、テキストを書いたりトークを生み出したりする人々の活動の中で、構文、カテゴリー、語彙を選択したり文章を解釈したりするための手続きを発生させているやり方は、可視化することができる。すなわち、T-discourse の社会的組織化は社会学の主題として探究することが可能であり、多様な場を協働する手続きを同定しその作用の仕方を分析することは可能である、とスミスは主張する。

SNAF に制御されたテキストと、SNAF に制御された社会の表象(政府機関などが産出する統計データ)との協働が、ウィルソンの著作において「アフリカ系アメリカ人の家族の現実」のテキスト内産出を可能にする。それぞれ独立に作動しているように見える専門化された場面は、イデオロギー・コードに秩序づけられながら言説的に協調し、内的に一貫した世界像を生み出していく。そして、この世界像に依拠してさらなる institutional なワークが組織化されていくのである。イデオロギー・コードは特定の言説の産出を秩序づける以上のことを行う。公的なテキストに媒介された言説と大規模な組織が交わる諸関係の内部で、複数の場面を協働させる中継点を準備するのである。

SNAF に感染したテキストはいたるところに存在し、あるひとつの「家族(The Family)」のヴァージョンに言説的なかたちと内実を与える。SNAF コードは、「標準的な北アメリカの家族」に包摂できない生活の相互支援のやり方を見えなくしたり、このヴァージョンの「家族」の構成要素を「満たさない」家族を可視化し、暗黙のうちにマイナス評価を与えたりする。このようにして、母親が世

帯主である家族の「欠陥」のある特徴を肯定する統計データが生成され、この「データ」に依拠しながら、実際に、福祉行政のための法が設計され、行政機関が協働されていく。そこにおいては、別のやり方が概念的に封じ込められている可能性がある。institutional な言説に習熟している、いわゆる専門的な訓練を受けた書き手や読み手は、SNAF コードの使用の仕方にも習熟しており、それゆえにかえって、SNAF に秩序づけられていない状況を見えなくさせられる可能性があるのである。

6. おわりに

「ありふれたもの」であるはずの日常生活世界が、疑問の余地のあるもの、疑わしいもの、不確実なものとして立ち現れてくるところに、スミスの社会学の探究の入り口がある。日常生活世界が疑問の余地のあるものとして立ち現れ、お決まりのルーティンを遂行し難くなったとき、人々は立ち止まり、いったい自分の日々の生活はどのような成り立ちをしているのかを問わざるを得なくなる。本稿で考察してきたのは、スミスが日々社会学者として行っている、「社会的なもの」を書いたり読んだりする institutional なワークの解明である。

ここでのスミスの関心は、テキストを読むことや書くことそれ自体というよりは、あくまで、毎日毎夜の局所的な場面と抽象的で脱局所的な社会関係の交点で起きていることの社会的探究にある。人々は従来、「社会的なもの」を知ろうとする時、特定の局所的場において特定の他者との関係で直接知られ、行為され、生きられる世界を、「支配する関係(ruling relation)」の特徴である客観化された様式で知り直してきたのだとスミスは言う。そして、この二つの「知ること(knowing)」にはしばしば断絶状態(disjuncture)が存在してきたのである。

1950年代のアメリカ合衆国西海岸カリフォルニア、バークレーで白人中産階級の妻や母として夫や幼い息子たちの世話をしながら、大学院で専門社会学者になるための訓練を受けていたスミスは、この二つの「知ること」のあいだを日々行き来していた。彼女は、北米の白人中産階級の妻や母としての生き方にはなほだしい違和感を感じていたが、当時 institutional な場面に流通していた専門的学問的言説においては、その違和感に対して納得する説明が得られなかった。そればかりか、女性が夫や子どもの世話をすることに喜びを感じられないということは、起こるはずのない「不可解」な事態であり、精神医療による治療の対象とされていたのである。本稿の議論をふまえれば、ここにも SNAF コードの作動が見出しようと考えられるだろう。SNAF コードやマザリング・ディコースに包摂され得ない「妻」や「母」の経験は、当時は、「社会問題」にすらならなかったのである。

1960年代末のカナダの女性運動への参加をとおして、スミスは、かつて感じた「違和感」について自分の経験の成り立ちを記述する別の方法を得る。そして、二つの「知ること」の断絶状態それ自体が、社会的探究の主題になりうることを見出していくのである。この断絶は、それ自体が社会的に組織化されている。すなわちそれは、institutional な場面に流通する「テキスト」を書いたり読んだりするアクチュアルな実践活動の産物である。個別的で具体的な個人々の経験は、テキストに媒介された言説によって、一般的で抽象的な社会関係に接続される。この過程で何が起きているかは、観察可能であり、社会的に考察可能なのである。スミスの社会学は、日常生活世界が、その外に拡張し、その内部では発見できない社会関係によって組織され決定されているとき何が起きているのかを、日常生活世界と institutional な過程の交点で協働する人々の実践活動の詳細に立ち戻って解明する社会的探究を追究しているのである。

【注】

- (1) **actuality** : スミスはこの語に中味を与えないのだと言う。なぜならば、この語には、その中で人々が生き、その中でテキストが読まれているところのテキストの外部を常に指示してほしいからだと言う。アクチュアル(**actual**)やアクチュアリティ(**actuality**)という概念は、探究されるべき世界——それは彼女あるいは彼が探究の仕事を行うところの世界と同じ世界——が既存の社会学的言説のテキストの外部にあることを指し示す。アクチュアリティは、常に、記述されうる、名づけられうる、分類されうるもの以上のものである(Smith 2005:223)。
- (2) **ワーク** : スミスは **work** という語の意味を拡張して使用している。ワークという用語は、一般的には、人々が賃金を得て行うことを指してきた。The Wages for Housework group(「家事労働に賃金を」グループ)は、この概念を家事(**housework**)だけでなく、時間や努力や意思を必要とする人々の行い全てを指すように拡大した。スミスの社会学はこの拡大されたワーク概念、人々が何らかのやり方で **institutional** な過程に参加している際に実際に行っていることを探究するために採用するのだと言う(Smith 2005:229)。
- (3) スミスは自らの社会学を、**sociology for women** あるいは **feminist sociology** と呼んできたが、それに加え近年は、彼女の社会学に依拠した社会学的探究を展開する研究者たちとともに **institutional ethnography** と呼ぶようにもなっている。**institution** は日本語では制度と訳されるのが一般的であり、筆者もその訳を暫定的に採用し「制度のエスノグラフィー」と表記している(上谷 2010, 2017ab)が、この訳では英語の1の意味が伝わらないと考えられる。
- (4) **T-discourses** は組織する。と同時にそれらもまた社会的に組織される。たとえば、社会学の **T-discourse** を、多様な専門的、政策的、政治的言説に編み込む諸関係の複合体が存在する(Smith 1999:158)。そのような様々な言説の概念や枠組は、支配する実践活動や制度的秩序のレベルでの変化によってイレギュラーなやり方で発展した、ある一つの社会学的言説に征服されることがある。アメリカ社会学会の毎年の学会のプログラムの折衷的な特徴を持っていることは、社会学のこうした複合的な関係の一端を示している、とスミスは指摘する。
- (5) George P. Murdock (1949) *Social Structure*. Macmillan. (G・P・マードック=内藤莞爾訳(2001)『社会構造—核家族の社会人類学』新泉社)。
- (6) 元は、Edward O. Wilson (1978) *On Human Nature*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press. p.553からの引用。邦訳は、エドワード・O・ウイルソン=岸由二訳(1997)『人間の本性について』筑摩書房、を参照。
- (7) Carol B. Stack (1974) *All Our Kin*. Harper and Row.
- (8) Jaber F. Gubrium & Kames A. Holstein (1990) *What Is Family*, Mayfield Publishing Co. = J・F・グブリアム J・A・ホルスタイン=中河・鮎川・湯川訳(1997)『家族とは何か—その言説と現実—』新曜社。
- (9) この点については上谷(2017ab)も参照。
- (10) 邦訳は、ウィリアム・J・ウィルソン=青木秀男監訳(1999)『アメリカのアンダークラス——本当に不利な立場に置かれた人々』明石書店、を参照。
- (11) **intact family** とは、Wilson(1987)における用語である。
- (12) James S. Coleman, et al. (1966) *Equality of Educational Opportunity*. Washington D.C. : Department of Health, Education and Welfare.
- (13) **インナーシティー**とは、都心に隣接している地域であり、しばしば社会的、経済的問題を抱え

ている地域である。詳細は、ウィルソン＝青木(1999：394)を参照。

- (14) スミスがあげるのは、Stack (1974)の議論である。
- (15) Mary Romero (1992) Ethnographical Evaluation of Behavioral Causes of Census Undercounts of Undocumented Immigrants and Salvadorans in the Mission District of San Francisco, CA. Report Submitted to the Center for Survey Methods Research, Bureau of the Census, Washington, D.C.
- (16) Henrietta L. Moore (1988) *Feminism and Anthropology*. University of Minnesota Press.
- (17) ここで挙げられたホーガンとキタガワの研究とは、D. P. Hogan and E. M. Kitagawa (1983) *The Impact of Social Status, Family Structure, and Neighborhood on the Fertility of Black Adolescents*. Chicago : Population Research Center, University of Chicago. である。
- (18) Moynihan, Daniel P. (1965) *The Negro Family : The Case for National Action*. Washiongton, D.C.: U.S.Department of Labor, Office of Policy Planning and Research. この点については、ウィルソン＝青木(1999：395)も参照。

【参考文献】

- Dorothy Smith (1990) *Texts, Facts, and Femininity: Exploring the Relations of Ruling*. Routledge.
- — — (1999) *Writing the Social : Critique, Theory and Investigations*. University of Toronto Press.
- — — (2005) *Institutional Ethnography: A Sociology for People*. Altamira Press.
- 上谷香陽(2007a)「日常生活世界から社会を知る方法——ドロシー・スミス『女性の立ち位置からの社会学』の着眼点——」文教大学国際学部紀要 27(2)、pp.1-16. 文教学部国際学部。
- — —(2007b)「日常生活世界の記述可能性——ドロシー・スミス『制度のエスノグラフィー』の着眼点——」文教大学国際学部紀要 28(1)、pp.1-22. 文教学部国際学部。
- ウィリアム・J・ウィルソン＝青木秀男監訳(1999)『アメリカのアンダークラス——本当に不利な立場に置かれた人々』明石書店。